

そ目此供より出たりしに城に入ても座は居るも人より
下座は極陰は居てもいとも人先は拭板て谷
地の城へ知らせをやと思ひ主人の持し長刀を近く座
人の立居るも目を配り諒る氣を付て窺ふ所奥
此座敷より三三人の足音して遠侍次の間を開け
来る者ありしを思ひ長刀押取のとき門外
としてかけ出る番の者後怪して遠侍に知らせ
十郎の供人長刀持て欠出るを遁るも追
かゝる輕平は夜一大事と走り多程に山形の北外水
より四五丁あきくに沖の原長河と云所して追ふ者

共馳付る輕平取て返り長刀は切まざる有松飛
鳥の如くよとよと輕平は元は近付者も數十人難
倒し三方に追散し余りに息の切れぬ水を天
と思ひとも在家へ立寄隙もなく長河の山村はつ水
後ろをきりに戦ひあひる為の方に江浦の者をん拭
て引く多敷の方を放れに防ぎて飲の海へかゝると
落るける進子此者も降きりとお重り輕平を起し
之を首打ちたり我輩の人のとうきむ合て山形を返り
ける備城中より白鳥十郎を思ひの怪は討取鏢を
吹立等して評議や有け人大将氏家尾張守其外大